

株式会社さくら都市綜合研究所

主 席
研究員

清水 秀幸

寄稿

人口減少社会と
地方都市の活力再生

53



今回の榑堂地区再開構想の基本軸は、約15haの地区全体を6つの街区に分け、それぞれの街区に特色を持たせ、来街者の回遊性を高めることで、街区ごとのにぎわいを創出するとともに、地区全体の活性化を図っていく

うとするものだ。

また、その街区ごとの特色を創出のためには、商業施設を軸としたまちであったり、文化・芸術が堪能できるまちであったり、時に遊興盛んなまちであったり、6つの街区の「顔（テーマ）」をいかに創り上げるかがその鍵となる。

また、一方では、「昼の顔」と「夜の顔」をどう打ち出していくか、という観点も見逃せない。相対的に昼の顔は「家族」がテーマであり、夜の顔は「おとな」がテーマとなるはずである。

か、という観点も見逃せない。相対的に昼の顔は「家族」がテーマであり、夜の顔は「おとな」がテーマとなるはずである。

ことで、有名老舗料亭が次々と暖簾（のれん）をおろしたことが、地区全体の地盤沈下に一層の拍車をかけたことも否めない。

読者もご承知のように、榑堂という街は、県下最大の歓楽街として自地共に認められた長い歴史を持つ。しかしながら、未曾有のデフレに端を発する景気の低迷と社会構造の変化の中で、徐々に色褪せながら今日を迎えている。

加えて、前稿でも述べたように、長野市内の商圈が人の流れの変化によって、完全に長野駅前周辺にシフトしたことにより、来街者の拠点となるイトーヨーカドーの求心力が著しく低下したこともその要因である。

言い換えれば、榑堂というまちは、昼の顔たる「イトーヨーカドーの求心力」と、夜の顔たる「歓楽街としてのブランド力」によって、今日まで支えられてきたといっても過言ではないのである。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市綜合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長